玉子王子　著

一章　個室へゴー。トイレにギャルを引き込もうとしたヤンキー、キ〇タマを蹴られ自分が無理やり引き込まれる

開店から三十年ぐらい経っていそうな喫茶店、メメントフォレスト。

店の奥に演奏する台がある。

店の客は大体、派手ないわゆるギャルと呼ばれる少女たち。

そしてあまり素行のよさそうではない若い男たち、いわゆるヤンキー

ギャル六十人ぐらいに、ヤンキーが二十人ほど、賑やかな店。

演奏台で、ギャルが歌っている。

それを、少し離れたところで見ている少女。ギャルの格好だが、あまり板についていない。

眼鏡で三つ編みのほうが似合いそうな、気弱に見える少女、川立冬香。高一。

試験会場で助けてくれたギャルに憧れ、高校から一念発起してギャルになったという結構痛い女の子。ギャルに憧れるのはいいとしても、いきなり恰好から入って「今日からギャルになる」というのは無茶だろう。

が、まあ運よく今のところはギャルとしてやっている。

店を見回す冬香。

――なんか、雰囲気ひどくなったなあ……前は普通の人がお客さんで。オタクの、怖くない感じの子もいて割と気楽にいられたのに……ヤンキーの人たちがそういう人たち追い出してるって本当かなあ？

ガン、コーヒーカップが音を立てるので、びくりと顔を上げる冬香。

ヤンキーだ。別に特に意味があるわけではないが、不思議と彼らは振る舞い自体が荒々しい。迷惑を顧みない、という事なのか。

暴力的だと、文句を言われない程度の形で示し、周りを威圧して得な取り扱いを受けようという戦略か。そこまで考えていないにしても、本能でやっているのか。

――な、なんでもっとゆっくりやれないのかな？　怖いよ……別に何もされてないけど……ああいう人たちに無理に迫られたら、断れるかわからない……

断るにしても、何とか丁重に……という形になるだろう。

――あ、そうか。ヤンキーの人たちに彼女がちゃんといたりするのは、別にかっこいいからでもなんでもないんだ。「断ったら怖いぞ」って示して、アプローチするリスクを下げて、数うちゃ当たるで……嫌な感じだな……ううん、うわべだけでそんなことダメだよ。気にくわない人を追い出すような人たちと同じになっちゃう……

「あー、なんか嫌だねえ」

隣に座るギャル。冬香と同じ学校で、同じグループ。ここにいるギャルたちはいくつかのグループの集まりである。

「凛が帰ってきたらがっかりするよ、これじゃ」

「そ、相談したほうがいいかな？」

「まだ何にも起きてないんだから、心配かけるのもな」

「そうだよね……」

――もともとのお客さんの半分ぐらいが追い出されて、ヤンキーの人たちと入れ替わってるんだよ？　何も起きてないって……やっぱりもともとギャルの人たちは根性あるって言うか……打たれ強いんだな……

元々、普通の男女もいれば、アイドル好きのオタクたちも楽しめる緩い共同体だった。

そういう場だから、気の弱い冬香も安心していられた。

――結局のところ、中心だった凛さんの人徳というか器の大きさのおかげだったんだよね。弱い者が排除されて、追い出されたりしない感じで……

それが、今やヤンキーだらけ。

いや、ヤンキーがいるのが悪いわけではない。

しかしここにいる、鯨掘苦『ゲイボルク』の者たちは質が悪かった。

この緩い共同体が気に入って入ってきたわけではない。

ギャルが集まっているのでうまいこと抑え込んで支配下に置き、彼女の供給源、もしくは手軽にヤれる女をプールする場所にしよう……というなんだかわからない方針で来ている。

邪魔な男や、女でも不細工には嫌がらせをして追い出す。

運よくそこそこの見栄えの冬香は難を逃れているが、この先どうなるのか不安を感じずにはいられない。

普通のギャルたちも多少は不安だ。しかし強引に来られても元々気の強い者が多いので、何とでもなると考えてある種様子見をしていた。

これが気の弱い文学少女の集まりとでもいうのなら、すでに逃げ散っているところだ。

それは一見弱いともいえるが、何かされる前に距離を取ったともいえる。

舞台の上で、ユニットの一つが歌っていた。

初めこそ、ヤンキーたちもお愛想で歓声を挙げていた。

オタクなどより、よほどノリがいい。

――こういうところはいいかな……って初めは思ったけど、でも実際は全然だめなのよね。あの人たちすぐ飽きるし……そもそもオタクの人たちと違って本当に楽しんでない……女の子相手にご機嫌取りして、あわよくば……ってだけだから、すぐ化けの皮がはがれる……

徐々に、歓声は下火になる。

元々歓声を上げてもらえるほどのレベルではないのだ。

アイドルなどに詳しく、評価の引き出しが多いオタクらは「通の目」でいいところを見出して楽しめもするが、普通の人間たちに素人芸でずっと楽しむのはきつい。

その点、ヤンキーらはある種同情されてもいいかもしれない。素人芸で盛り上がり続けろといわれるのも酷だろう。

仲間のギャルたちも、割と無理をして声援を送っている。

飽きたヤンキーたち。

飽きるというか、初めからあんまり楽しんでいない。

ご機嫌取りで声をかけただけ。

むしろ、楽しみはこれからだ。

冬香はコーヒーを手に取る。

舞台の上にヤンキーたちが近づく。

「ほらほら、もっと盛り上げろよ！」

「そうそう、ほら、パンツでも見せるとか」

「手伝ってやろうか！」

セクハラ。

それが楽しいというのもあるだろうし、手心目当てにあわよくばという期待もある。セクハラされないようにいい顔してくれることも期待しているかもしれない。

まあ複合的な動機からの行動といえる。

気の強いギャルたちなので、怯えて泣き出しはしない。

「やめろこら！　キ〇タマ蹴るぞ！」

「よそでやれ！　お前らもギャルにしてやろうか！？　男の急所二個とも潰してやろうか！？」

むしろ怒鳴り散らす。

ヤンキーたちは笑って、多少は大人しくなる。が、またすぐ再開する。

掛け合い、というふうに見えなくもない。

だがユニットを組んでいるギャルたちにとって一様夢を追って努力しているところなのだ。

それをセクハラで妨害されるのは溜まったものではない。

目をそらす冬香。

――ここも、お終いかな……凛さんが戻るまでは……って思って頑張ってきたけど……

店に来るだけで「頑張っている」と表現するほど、現状はストレスの塊だった。

――それでも、直接触ってきたり、無理やり何かってことはないから、我慢できないこともないけど……

それでもつらい。

と、下腹部に違和感を覚える。

トイレだ。

大勢客が来ることを想定した店なので、トイレは奥にあり、いくつも個室がある。

個室と、小便器が廊下の左右に背中合わせという感じだ。

――っていうか、これ男の子丸出しだよね……時々見えちゃったし……最悪だよ。

ギャルより眼鏡委員長的な冬香であるから、当然のようにバリバリの処女だ。

学校でも割と男子便所は廊下から見えるところに小便器があるが、それからは目をそらしてきた、

しかしここではあまりにも近いので、たまに見てしまう。

生粋のギャルたちなら、笑えるネタであるが、冬香にはきつい。

特に相手が怒りもしないし逆にセクハラしてくるでもないオタクなどなら、ギャルはむしろ覗きに行き「お前デカいじゃーん」などと童貞だろう相手を悶絶させるセリフを吐きつつ、丸出しのモノを握ったりする。

ほら見てみなよ、などといわれれば一様ギャルとして生きている手前冬香も適当に合わせて見ざるを得ない。

――まだ処女なのに、結構な本数見ちゃった……男子と手も繋いだことがないから、さすがに、握ることはまだしてないけど……ぶっといから握ってみなよー、とか普通に言ってくるんだよね。

顔を赤らめつつ、トイレに入る。

と、閉まっていた個室が開く。

小便器と個室があるからには、個室にいるのは女子と思っていた。

しかし、女子はなかなか一人でトイレには来ない。

いろいろ理由があるだろうが、一番重要なのは防犯という意味合いではないだろうか。

男でも個室を使う時がある。

一つだけ個室が閉まっていれば、その形のほうが多いと考えるべきだったかもしれない。

ヤンキーが出てきたので、あっと思わず声をあげそうになる。

――お、男の子だったんだ……別に、それでどうってことないけど……

「おー、ねえどっち行くの？」

「え？　ど、どっちって？」

「大か小」

青ざめる冬香。

楽しかったころの思い出で赤らんだ顔が真っ青になる。

うつむき、個室に入ろうとする。

と、その肩をつかむヤンキー。

「無視するの？　傷付くなー」

――うつむいてんの。ギャルにしちゃ気が弱そうでいいじゃん。やれんじゃね？　一人で便所にくるボッチだし、多少強引にしても黙ってたりして。

「無視なんてしてません」

「じゃあ話聞いてよ」

――ギャルの集まってる場所があるっていうから来たけど、なんか関係ないのも大勢いて、追い出すのに時間かかった。こっからは安心して入れ食い。……ってことはないな。もともとの雰囲気とか全然違うんだから、そんな長いことここにギャルどもが留まってるとは限らない。邪魔ものが消え、場も完全に壊れてない今が食べごろ。のろのろしてたらくいっぱぐれる。こんな女だらけの場所にいたのに、空気みたいにいるだけだったオタク連中と俺は違う。積極的にいくぞ。

現状がずっと続くと勘違いして、ある種の牧場でも手に入れた気分のものもいれば、この男のように場が流動的と考えている者もいる。

ヤンキーといっても色々というわけだ。

「最近彼女と別れてさー」

――嘘だけどさ。「セフレになれ、とにかくマ〇コ使わせろ！」というより「強引に口説いて彼女にしようとしてる」ほうがこいつも受け入れやすいもんな。

「寂しいんだ、慰めてよ」

「ごめんなさい、まずトイレに……」

「いや、返事なんてすぐじゃん。俺みたいな不細工、どうしても、絶対嫌、っていうんなら、断ってくれてもいいんだし」

「ええ……何ですかそれ……」

膝を締め、唇を噛む。

「別に不細工とも思わないし、どうしても嫌ってこともないけど……でも付き合うなんて、何も知らないし」

「じゃあこれから知り合おうよ。決まり！」

肩を掴む。

そして個室に押し込みに来る。

「え、ちょ……」

「ほらほら、入って。二人っきりのほうがいいでしょ？」

血の気が引く。

――な、なにを……いや、まさか無理やり。そんな……そんな強引なこと……触られた子だってまだいないって……私処女なのに……誰か助けて、凛さん……

同じ年だが、行動力もあり気も強く、格闘技などやっているわけでもないのに喧嘩で負けたこともないという、冬香から見れば超人のような憧れの人。

高校受験の時、父兄に紛れ込んだ変質者にトイレで襲われかけたとき、助けてくれた少女。

と、その時のことを唐突に思い出す冬香。

唐突というか、その時と似たような状況といえる。

――あ、あの時は確か……

チラ、と目線を下げる。もともと背はヤンキーより低いので、下を見るのに不便はない。

目線に気づくヤンキー。

冬香が服越しに見ているのは、肉玉。

ヤンキーは、それを誤解して頬を緩める。

――そうそう、今からそれ、入れられちゃいまーす。もしかして処女かな？　ならラッキーだな。だって……

「あ、あの。本当にやめてください。迷惑です」

「ひどい、傷付いた！　っていうか、差別だ。ヤンキーだから嫌なんだろ！？」

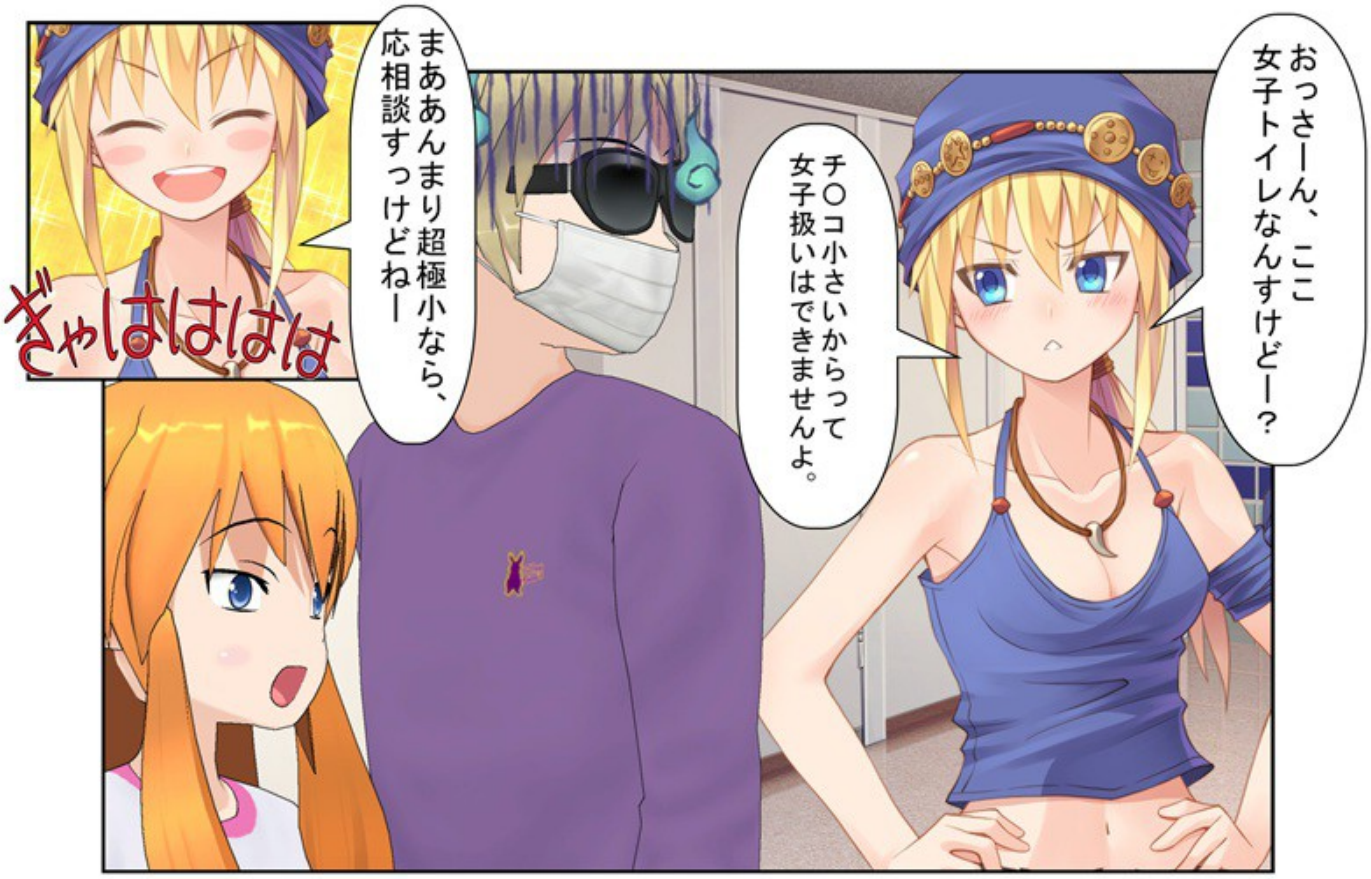
「もうわけわからない……」

――やるしかない。凛さんに教えてもらった通り……

一八〇ぐらいある変質者。個室に連れ込まれかけ、声も出せなかった冬香。

そこで、偶然居合わせたというか自分もトイレに来た井上が異変に気付いた。

「おっさーん、ここ女子トイレなんすけどー？　チ〇コ小さいからって女子扱いはできませんよ。まああんまり超極小なら、応相談すっけどねー」



気づかれたと驚き、振り返る変質者。

その背中を見ているしかできなかった冬香。

変質者が井上に掴みかかったとき、驚くべきことが起こった。

「はぐっ！　ちょ、そこはあああ！」

変質者の奇妙な絶叫。尻を後ろに突き出すようなおかしな恰好をして、その場に膝をつく。

舌を突き出しながら、井上はそれを見下ろしていた。

「ぎゃはははは！　ごめんおじさーん、お腹狙ったんだけど……変なとこに当たっちゃったね……おキ〇タマ死んだ？　おキ〇タマ死んだ？　っていうか変態行為中だったんだから、チ〇ポ立ってたんじゃね？　ついでにチ〇ポも折れちゃったりして……折れるほどねーか！」

「こ、このガキいいい……あ、ちょ……ういっ！」

「キーン！　と、あれー？　腹蹴り上げるつもりだったのに、ちょっと下に当たっちゃったねー？　っていうかまだ痛がるってことは、さっきの金蹴りで玉潰れてなかったんだ。ラッキーじゃん。でも今ので潰れましたかな？　潰れちゃいましたかな？　女体化物の主人公になっちゃいましたかな？　いや、まだかな……なら、キーンキーンキーン！」

軽く、足の甲で連続蹴り上げ。膝をついた状態では避けようがない。

手で防御というか、玉を庇っているがそれ越し衝撃が伝わる。

「ちょ、まって、降参、降参！　玉はやめて！」

「あ、しまった！　また腹狙ったのに、キ〇タマに！　え、キーンっていって、明らかに狙ってる？　知られたからには……」

膝立ちで身動き取れない変質者を突き倒し、

「キ〇タマ潰しー！」

片足を掴んで股間を踏み潰しまくる井上。

「ほごおおおおおおおお！　警察、警察に行かせ……自首しますから玉だけはあああ！」

のたうち、足を締めようとして、間に井上がいるので締められず、なすすべなく玉を踏み潰される変質者。涎を垂らすようにして、興奮した顔で踏みつけ続ける井上。

「いいよそんな。それより**キ〇タマ分からせ**のほうがいいもん。そーら、潰れろ潰れろ、マジキ〇タマ潰れろー。変態野郎は去勢だ去勢ー」

「ひぎゃあああああああ！」

初心な冬香でも、男の体について多少の知識はあった。

ギャル少女に容赦なく睾丸を踏み潰される変質者を見下ろしながら真っ赤になる。

「うわ、そんな……そこをそんな風に……わあ」

――男の人のアソコって、きゅ、急所なんだよね……それをあんな思いっきり……つ、潰れちゃう、その、お、お、おキンキン……大事なものが……あ、でも今はコンビニでナノメカ入りの薬が買えて、タマタマぐらいならすぐ治るんだった。じゃあ別にこれはやってもいいのか……

別に良くないだろう。

去勢されてそのまんま、という最悪は避けられるが、去勢自体は「彼の玉は後でスタッフが再生させておきました」とテロップが出ようが出まいが苦痛と屈辱の極致だ。

しかし「初心な女」というある意味金的のダメージに最も遠い人種に理解でいることではなかった。

しばらく後、泡を吹いて気絶した変質者の横で、冬香は涙ながらに礼を言う。

「あ、ありがとうございました！」

「女最強！　ってだけのことだから。それじゃ……あ、そうだ。今度ああいうクソキ〇タマにあったら……ね、どうしたらいいか分かったよね？」

「で、でも……」

「反撃が怖い？　気にすることないって、男なんてキ〇タマ潰されたらお終いのよっわーい生き物なんだから。女がキ〇タマ狙わないであげてるうちだけ威張ってられんのよ。まあ潰れたら治らない時代なら、最弱ザコ野郎であるタマタマ金ちゃんに気を使うのはわかるけど……今はいくらでもタ〇キン再生できるんだから、遠慮すんなよ。金ちゃん狙っちゃえ、金ちゃん」

パンパン、とスカートの前を叩いて見せる井上。

その後、井上に憧れて高校入学と同時にギャルデビューし、所属したグループが井上のグループと交流をもったことで偶然再会し、そのあとにもいろいろ助けられたり教えられたりした。

――そうだ、タマタマ狙うときは……

手の甲。

指を開いて、その辺りで相手の顔を打つ。

目打ち、と呼ばれる拳法の技だという。

友人のオタクが漫画から仕入れた知識を教えてもらったらしい。

目を指で突くのと違って面で打つので当たりやすいし「指で目をブッ刺す」のに比べて遥かに心理的負担なしにできる。

――目もタマタマと同じように薬ですぐ治るみたいだけど、目を潰すなんてできるわけないよ。でも、叩くだけなら……そうやって視界を奪い、隙をついて**おキ〇タマをぶっ潰す！**

同じように「再生できる球体状の臓器」でありながら、片方は潰せない、片方は当然のようにぶっ潰す。

その差が生まれるのは、やはり目玉は持っていてももう一方の玉のほうを彼女は持っていないので痛みもなにも想像できないという事に尽きるだろう。

「さー、彼女になったんだ、名前教えてよ」

「蚊が」

「え、あっ！」

バシ、と顔面を指の辺りを叩き付けるように殴られ、のけぞるヤンキー。

「おいあぶねえよ！　あああ、目がっ、目がああああ」

目を瞑る、涙がにじむ。

十秒も立たずに視界は戻るだろうが、この一瞬は何も見えない。よろける。

「あ、大丈夫ですか！？」

支えるかのように、服を掴む。

掴みつつ、倒れないように開かれたヤンキーの足の間に膝を跳ね上げる。

男の本能は最大の急所である睾丸を最優先で守るようになっている。

視界が閉ざされていようと、太ももの間を何かが上がってくればとっさに足を閉じる。

が、間に合わない。

細い膝が、グリ、と嫌な音を立ててズボンの膨らみを押し潰す。

「はぐっ！」

膨らんだパンツ。その下の肉袋。その中の肉玉二つをゴリっと左右に押し分ける。

蹴られた、という驚きの後、徐々にダメージが広がる。

「あ、あ……あ……ふんんんんおおおおおおおお！」

衝撃自体は華奢な少女の膝蹴りであり、大したことはない。

腎臓や肝臓、鳩尾や脇腹、顔面など急所にでも食らわない限り、ヤンキーにとって攻撃というほどのこともないものだ。

いや、それらの急所でもそれほどのダメージにならない程度の威力だ。

しかし、今当たったのは急所中の急所、人体最弱を眼球と競う部分。

強度としては、競っている。

しかし、眼球とそこでは、扱いが違う。

もし神がいて、人間の体をデザインしたのだとしたら、眼球とそこの扱いの差は明らかに何か含みがあってやっているとしか思えない。

眼球は外に出る部分をギリギリまで絞り込み、ほとんどの部分を頭がい骨というアーマーにがっしり守られている。

一方でそこ、睾丸といえばちょうど蹴りやすい足の間にぶら下がり、アーマーなどはなく、多少お情けで分厚い皮に守られているだけだ――さすがにほんの少し良心の呵責があったのかもしれない。

「あいいいい、あいいいいいいいい、た、たまあああああ」

最弱の部分を蹴り上げられ、股間を押さえて悶絶するヤンキー。

「や、やった……」

ほっ、と顔を緩める冬香。

実際金的蹴りをしたことなどない彼女だが、目の前の男が無力化された感じなのはなんとなく分かった。

股間を押さえ、膝をつくヤンキー。汗を噴出させ、震えつつ見上げる。

「こ、こいつ、なにが「やった」だ……ぶっ殺す、ぶっ殺してレ〇プする……レ〇プ……」

「そ、そんな……ふざけないで！　悪いのはあなたでしょ！」

「ざけ……あっ、ちょっと、はぐっ！」

ボス、足の甲を股間に叩き付ける冬香。手で股間を押さえているとはいえ、衝撃が伝わる。

「お、落ち着け、落ち着いて……あっ！」

「何が落ち着けよ……レ、レ……その言葉が女の子にとってどれだけ怖い言葉か、男にはわからないのよ。わからせてやる、わからせてやる。一番大事なところをむっちゃクソにして……**キ〇タマ二個とも潰して！**」

「え、うそ……やだ、やだ……やりすぎ、喧嘩でキ〇タマ潰すのはやり過ぎ！」

「はは、それはタマタマが潰れたら治らなかった時代の話でしょ。今は治るからいいのよ！」

「どういう倫理だよ！？　どういう倫理だよ！？ いやだ、玉潰しだけは嫌だ！」

「ナノテクがそんなに発達してなくて、タマタマが潰れたら治らないパラレルワールドに生まれたらよかったねー。……もしくは女に生まれたらねっ！」

「うわっ、誰か……」

「なに人を呼ぼうとしてるのよ、二人っきりのほうがいいでしょ？」

床に転がるのも気にせず、倒れ、這って逃げようとするヤンキー。

外から冬香を押し込む形だった関係上、扉は後ろだ。

体をねじり、後ろに倒れる形。

手は扉のほうに出して、床につく形だ。

とっさだったので、忘れていた。

最優先で、急所を守らねばならない状況であることを。

「んー、空いてんじゃーん」

「え、あ……おぶっ！」

「まずは膝！　踏み潰して壊す！　それが**暗殺魔術師**のメソッド！」

古いラノベネタらしい、これもオタクに聞いた話だった。

が、あまり意味はない。

膝など初めから狙っていないのだから。

踏み潰しに行ったのは、股間である。

膝をついていた状態から、後ろに倒れるように体をねじっていたヤンキー。

その態勢なら下から蹴るより、踏み潰したほうがいいととっさに判断した冬香は格闘センスがあるといえるだろう。

唾を飛ばし、絶叫するヤンキー。

「おぐあおおおおおおおお！　そこは膝じゃねえええええええ！」

「あ、やだ……ごめんごめん、膝狙ったんだけど……変なところに当たっちゃったね」

「ひんぐううう、もう無理いいい、許してくださいいいい」

「涙と鼻水でぐちゃぐちゃじゃない、風邪なの？　ぷっ。とりあえず入って入って」

髪の毛をつかみ、無理やり個室に引きずり込む。

そんなに広いわけでもないが、便所で暴れるよりはましと判断した。

「さー、おキンキン処刑の始まりですよー。痛い痛いですよー」

――やだ、私ったら何言ってるの？　何する気なの？　でも、面白い……こんな暴力的なヤンキーを、私みたいな女の子が……タマタマ狙っただけでひいひい言わせられるなんて……タマタマ責めって面白い。凛さんの言ってたこと、分かっちゃった。うふ、私……男の人の、金ちゃん好きかも。

潰したい、という感情を「好き」と呼んでいいのだろか。

ヤンキーをトイレの個室に引きずり込み、扉を閉める冬香。

体験版終わり

この後、ヤンキーくんに金潰しの運命が。

気弱だった少女は、それに自信をつけて自分の居場所を守るため、ゲイボルクとの戦いに挑みます。

もちろん、その武器は金責め金責め、金的さえ狙えば男に勝てるという確信の元、突っ走ります。

製品版をぜひお買い上げください。